

新入生のみなさん、入学おめでとうございます。

京都府知事様をはじめ壇上の来賓のみなさま、ならびに京都府公立大学法人および京都府立大学の教職員一同を代表して、みなさんの入学を心より祝福し、一言お祝いの言葉を述べたいと思います。

難関をのりこえて大学・大学院に入学・進学した新入生のみなさんは、ご家族・保証人とともに達成感と希望にみちて、この入学式に参列していることと思います。これからの大学の四年間、あるいは大学院修士課程二年、博士課程三年の間には、さまざまな喜びや試練が待ち受けていることでしょう。学生時代の良いところは、お金はないけれど体力と時間はたっぷりあるという点です。府立大学の学生・大学院生として、勉学や課外活動のなかで新たな課題に挑戦し、一生つきあえる友人や仲間を作ってくださいることをまず希望します。

「学校教育法」では、大学の目的・使命を規定して「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し」「その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」と述べています。「学術の中心として」というところが大事なところですが、学術とは、知的生産ならびに知的生産にかかわる技術・技法のことですが、大学はその中心として教育研究、社会貢献を遂行する使命をおびています。府立大学もこれをうけて、「京都府における知の拠点」として、教育研究、地域貢献を遂行することを理念・目的に掲げています。

この大学の目的にかかわって、近年、「学び続ける力」をもつ学生を育てることが大きな課題となってきました。そのなかにあって教養教育を重視する議論が活発になっています。大学の学士課程は、教養教育と専門教育によって編成されています。本学でも教養教育センターを設置して教養教育を全学的に実施しており、カリキュラムのうえでの教養教育の位置づけも明確です。教養教育のない大学院においても自分の所属する専攻の専門研究だけでなく、他の専攻・研究室に出向いて隣接諸科学を学ぶことが重視されだしました。大学院においても広い意味での教養教育が必要だというわけです。なぜでしょうか。

教養の考え方にはいろいろあります。昨年11月22日に本学の教養教育センターが、各学部の1回生から3回生まで数十名の学生諸君をあつめて、「新しい教養教育をつくる学生ワークショップ」を開催しました。そのなかで君たちの先輩から教養教育あるいは教養についてのいろいろな意見がでました。おもなものをひろってみますと、「社会人としての常識」、「知識や考え方が広がる」、「世界を知る」、「広い視野」、「人とのつながり」、「生きる力」など、さまざまです。学生諸君からだされた意見を集約すると、教養教育とは、「単なる知識の集積ではなく、他者や社会とつながりながら、現代世界を生きていくうえで求められる人間的資質」であるということになりそうです。これも教養教育についての大事な考えかたです。

学術としての教養教育の根幹は、君たちの先輩も「世界を知る」、「広い視野」をあげているように、全体を見る眼を養うことにあると思います。全体がわかるように努力すれば、自分がいかにもの知らないかがわかってきます。ものを知らないということが学術にとって大変大事なと

ころです。

中国の古典に「足らざるを知る」「知不足」という言葉があります。二千百年ほど前に編纂された『礼記』という儒家の古典があり、その中に学問について論じた学記篇があります。そこに「学んで然る後に足らざるを知り、教えて然る後に<sup>く</sup>困しむを知る」という言葉がでてきます。これは、「主体的に学んでみて始めて、自分の足りないところ、欠点が分かる。教えてみて始めて、自分の学問の不充足さがわかって困難を感じる」という意味です。足りないことがわかるのは、学んだ結果、ある程度全体を知っているからです。裏を返すと、学んで愚者に徹しなければ全体は見えてきません。

学術の全体性を学ぶことができるのは教養教育です。専門教育は限定された学術分野を徹底して学びます。近年の専門諸科学は細分化がかなり進んでいるので、徹底して学んでも、学部の四年間では専門家にはなれません。また細分化し、限定された専門を広い視野から相対化して見ることができなければ、専門の意味も結局理解できないままに終わります。

ただ学術の全体性を学びうるような教養教育になっているかといえば、現行の本学の教養教育にはまだまだ不十分なところがあります。その意味で教養教育の改革は継続的な課題です。「教えて然る後に<sup>く</sup>困しむを知る」ということが大事になります。本学では、京都府の財政的支援をうけて教養教育のための新しい学舎を建設し、来年度の4月から、京都府立医科大学・京都工芸繊維大学と連携して教養教育の共同実施を開始します。三大学がもっている個性を生かしつつ、一つの大学ではおおいきれない幅広い学術の世界にふれてもらえることをめざして、最後の準備段階にはいっています。学部の新入生も二年目からになりますが、新たな教養教育にふれることになります。

みなさんがくぐる学術の門戸は、自らの意志で主体的に学んでいかなければならない世界です。自分が愚者であり、わずかなことしか知っていないことを自覚しなければ、主体的に学び続ける原動力は生まれません。愚者としての生き方を学生として実現していただくことを切に希望して、私からの式辞といたします。

入学おめでとうございました。

2013年4月4日 学長 渡辺 信一郎